

「オロリン」

# ORORIN

公立大学法人島根県立大学広報誌 ———— vol.11 2019.5 ———— 地域と大学の交流誌

p.2-4

@ラオス&しまね

ラオスを伝える、  
支援する「ラオス広報部」



p.6-7

松江キャンパス学生座談会  
新学部・学科再編後の一年生が語る！



地域の文化を  
英語で伝える

ダスティン・キッド准教授  
(島根県立大学短期大学部総合文化学科)

# ラオスを伝える、支援する

## 「ラオス広報部」学生代表座談会

東南アジア・ラオスの文化や社会課題を伝える「ラオス広報部」。島根県立大学・松江キャンパスの一年生たちが二〇一八年の五月頃から開始したプロジェクトです。精力的な取り組みが評価され、学生の自主的な課外活動を支援する県立大学の制度「キラキラドリムプロジェクト」にも採択されました。そんなラオス広報部の活動について、メンバーに話を聞きました。

高瀬美咲さん（短期大学部総合文化学科 1年生）、石原美帆さん（同一年生）、高見月菜さん（同一年生）、村尾江梨さん（同一年生）※学年は取材時点（二〇一九年三月）  
（インタビュー・構成・写真：福岡桃華、編集協力：瀬下翔太）

村尾 だからチーム名も「ラオス広報部」なんだよね。

●活動を振り返って  
——年間やってきた活動や、苦労したことを教えてください。



高瀬 私の幼馴染のお母さんがラオス出身だったことです。その縁で小さいころからラオスのことを知る機会がありました。大学に入ったからラオスへの支援活動をやらうと思っていたのですが、個人でできることには限界があるとも感じていました。そこで県立大学の課外活動の助成制度「キラキラドリムプロジェクト」を活用し、仲間を集めようと考えました。そうした動きが実って、一緒に活動するメンバーが今では十二人もいます。

石原 私は高瀬さんに誘われなかったら、ラオスに興味を持つことはなかったんじゃないかと思っています。ほかのみんなも、最初はそうだったんじゃないかな。

高見 国名も知らなかったくらいだよ（笑）。私たち自身がラオスについて知らなかったということを踏まえて「ラオスへの支援が活発化するには、まずラオスの知名度を高める必要があるのではないか」と仮説を立てました。

高瀬 ラオス広報部は二〇一九年度から県立大学の正式なサークルとして活動します。ほかのキャンパスのサークルと連携して活動できたらと思っています。また、ラオスに関するイベントに参加したり、ラオスを研究している他大学の方と交流したり、やりたいこと

●ラオス広報部のこれから  
——最後に、皆さん自身やラオス広報部のこれからについて聞かせてください。

高見 私はしまね大交流会でパンフレットをつくったことが印象に残っています。かたちある広報活動ができた初めての機会でした。予想以上の数の人が手に取ってくださり、一番「ラオス広報部」らしい活動だったのではないかと感じています。

石原 高校での料理教室は、自分たちでゼロからつくりあげた部分が多くて大変でした。高見 そうだね。ラオス料理の試作に始まって、高校にアポイントメントを取ったり、先生方や生徒の皆さんと打ち合わせをしたり、自分たちで最初から最後までやったからね。村尾 活動を続けていくうちに、あちこちから声がかかるようになりました。たとえば、県内の若者向けイベント「しまね大交流会」への出展は、私たちの活動を見た大学の管理課の方が誘ってくださったものでした。高見 活動を通じて知り合った方々から、イベントへの出展依頼が来るようになりました。広報の成果が出てきたのかなと思います。

高瀬 ラオス広報部は二〇一九年度から県立大学の正式なサークルとして活動します。ほかのキャンパスのサークルと連携して活動できたらと思っています。また、ラオスに関するイベントに参加したり、ラオスを研究している他大学の方と交流したり、やりたいこと



石原 私は飛鳥祭でラオス料理を提供したことが印象に残っています。みんなで一緒に頑張ったという感じがあったし、準備期間も含めて、一番時間がかかった活動でもありました。村尾 私も飛鳥祭が印象的です。どれだけの人が来るか想像できませんでしたが、本当に多くの方々が足を運んでくれま



高校訪問



飛鳥祭にて

## ラオス広報部・リーダーに聞く!

人に頼れる自分になる

森脇美麗空

(島根県立大学短期大学部  
総合文化学科一年生)

「ラオス広報部のリーダーを務めて、森脇さんが成長できた点はどこですか。」

人に頼れるようになったことです。大学入学以前にも、学校のなかでリーダーになることはありましたが、ほかの人に仕事を任せるということが上手にできませんでした。なかなか申し訳ないような気がして、自分でやってしまうことが多かったのです。

「人に頼れる自分」に変わることができたきっかけや、その過程の苦労を教えてください。



きっかけは、ラオス広報部のメンバーが「自分を変えたい、成長したい」という思いを持っている人ばかりだったからです。みんなに頼って仕事を分担しないと、それぞれが成長するためのきっかけをつくることはできないだろうと思いました。それに、まずは私自身がなんでも自分でやってしまう性格を変えたいと思いました。最初はメンバーの個性も十分にわからず仕事の振り分けに苦労しましたが、なんとかやり遂げることができました。いまではメンバーそれぞれが「成長できた」という実感を持っていると思います。

人に頼れるようになって良かったなど感じる部分はありますか。

リーダーとして取り組むべきことに時間を使えるようになりました。たとえば、メンバーの個性ややりたいことを引き出したり、自分

たち以外の学生や社会人の団体に向けたメッセージを考えたります。

「これまでの活動のなかで、印象に残っているエピソードを教えてください。」

他の人も挙げていましたが、一番は飛鳥祭(大宇祭)です。私は当日の会場入りが遅れてしまったのですが、メンバーのひとりが自分の代わりに指示を出して準備を始めてくれたのです。以前は自分から動けなかったメンバーが主体的に活動を進められるようになっていたことに感動し、本当に嬉しかったです。

(インタビュー・構成:高瀬美咲・柳楽敬明・石原美帆、写真:福岡桃華 ※学年は取材時点(二〇一九年三月))

ラオス広報部メンバーが語る、  
リーダー・森脇さん



尊敬してあげよう! 宅和奈南さん

ノリが良く、頼れる存在 和田祐紀さん

周りをきちんと見ていて常に感謝の気持ちで大事にしている。優しい。酒村真凛さん

いい人! とにかくいい人! 能海織子さん

ORORIN  
[オロリン]

## 地域の文化を英語で伝える

ダスティン・キッド准教授 (島根県立大学短期大学部総合文化学科)

英語を用いた異文化理解や、地域に飛び出して学ぶ授業を展開するダスティン・キッド先生。成蹊大学の学生との合同ゼミや、地域の方々と連携し、石見銀山で二泊三日のフィールドワークを行うなど、特徴的な教育活動に取り組んでいます。



ゼミの風景



キッド先生 (写真:本間千裕)



キッド先生と学生



美保神社でバジャリ

●キッド先生の人気授業! 「文化とガイド」  
キッド先生が教える「文化とガイド」は、由志園や美保神社など、松江市内を中心とした山陰の観光スポットを英語でガイドできるようになることを目指す授業です。受講者は、授業の後半に実際にまちに飛び出してガイドを実践します。島根県の文化に関する知識と英語力、双方を磨く人気科目!

# 松江キャンパス学生座談会

## —新学部・学科再編後の二回生が語る！—

仙田琴音（人間文化学部地域文化学科1年生）、  
野津成美（同1年生）、  
濱口杏香（短期大学部総合文化学科1年生）  
※学年は取材時点（二〇一九年三月）  
（インタビュー：構成・写真・瀬下翔太、福岡桃華）



昨年、松江キャンパスでは人間文化学部が新設されたり、短期大学部の学科再編があったりと、大きな変化がありました。学部学科変更後に入学した三人の一回生に、大学での学びや活動について聞きました。

—県立大学に入学しようと思った理由を教えてください。

野津 私は読書が大好きで、将来は図書館で働きたいと思っています。そこで、図書館司書の資格を取ることができる地域文化学科を選びました。

仙田 私も野津さんと同じように本が好きで、将来国語の先生になりたいと思っています。地域文化学科では、中学校・高校の国語の教員免許を取ることができるため、この学科を選びました。高校生のときに大学を見学した際、学生主体で様々な活動が行われていることを知り、その点も魅力的に感じました。

濱口 私はKPOPを始めとする韓国の文化が大好きで、高校生の頃から自分で韓国語を勉強していました。受験の前に県立大学の学部学科改編について調べて、海外の文化について学ぶことができる短期大学部総合文化学科に入学しました。

### ●地域の文化に触れる

—これまでの大学の学びのなかで印象に

と文化に関するお話は、私が学びたいことそのものでした。

—サークルや部活動など、学生生活について聞かせてください。

仙田 私たちは三人ともラオス広報部（2-4ページ）に参加しています。また、私はティンホイッスルサークルにも入っています。ティンホイッスルは、小泉八雲が育ったアイルランドの縦笛です。大学の先生方や山陰アイルランド協会の方々には教わりながら、地域のイベント等で演奏しています。

濱口 私は、国際関係や平和に関する活動をするTYDサークルや水泳部にも入っています。大学に入る前は学校でリーダーや部長を務めたことはなかったのですが、大学では役職を任される機会も増え、充実しています。野津 私は茶道部で副部長をしています。濱口さんと同じように、私も表に立つようなタイプではなかったのですが、大学に入ってからサークルなどの会議で自分の意見を提案できるようになりました。

### ●自発的に行動できる学生に！

—大学に入ってから成長した、変わったなと思う部分を教えてください。

残っていることや、これから学びたいことを教えてください。

野津 塩谷も先生の文化人類学の授業が印象的でした。日本の文化と海外の文化を比較していくなかで、これまで持っていた文化観が揺さぶられました。私は星が綺麗な中山間地で育ったのですが、そうした人口の少ない地域だからこそできる観光のあり方について学ぶ観光学の授業も興味深かったです。

濱口 私が楽しみにしているのは、四月からダスティン・キッド先生（5ページ）のゼミで異文化交流について学ぶことです。松江の観光スポット付近に暮らしているため、高校生の頃に外国人の方を案内する経験がありました。その経験と大学での学びを結びつけていきたいと思っています。大学という固いイメージがありました。先生との距離が近くて、意見を受け入れてもらえるので、楽しく学んでいます。

仙田 私は、民俗学を専攻していらっしやる中野洋平先生の授業が心に残っています。昨年私も参加した「しまね大交流会」の立ち上げにも関わっておられる中野先生が語る地域

野津 大学入学前の私は、いろいろな活動を一歩下がって引いた目で見てしまうところがありました。しかし、大学に入ってから自分から意見を言ったり、行動したりできるようになりました。島根県立大学には前向きな行動を後押ししてくれる環境があります。

濱口 今までは言われてからでないと行動できないことが多かったのですが、自発的に動けるようになりました。周りにはやる気がある人や目的を持って行動している人が多いので、刺激になっています。

仙田 私は、大学入学前から、授業で積極的に質問したり意見を発表したり、自分の興味に基づいて活動したりしてみたいと思っていました。大学に入って、それを実際にやれるようになりました。

—三人とも充実した大学生活を送っていることがよくわかりました。ありがとうございます。



## ラオス広報部と多文化共生

ラオス広報部（214ページ）の顧問であり、ラオス史を専門とする増原善之准教授に、学生の活動に対する見方や、地域における多文化共生について聞きました。

——ラオス広報部との出会いを教えてください。

私は二〇一八年の四月に、人間文化学部の新設に伴って島根県立大学にやってきました。着任してすぐに学生たちが研究室に来て「ラオスの子どもたちを支援するプロジェクトをやりたい」と相談を持ちかけてきたのです。しかも、学生たちがラオスに興味を持つ



きっかけとなった人は、偶然にも旧知のラオス人でした。ラオス出身の知人と県立大学の学生、そして私が島根県でつながった。不思議な出会いがあるものだと思います。

——学生たちの活動に対してどのように関わっていらっしゃいますか。

学生たちがラオスの文化について理解を深めるためのサポートをしています。「ラオスを支援したい」と学生は言いますが、貧しい国だというイメージだけがラオスの姿ではありません。せっかくの広報活動が、かえって偏見を助長してしまうことがないように、学生たちがつくる資料にコメントしたり、一緒にイベントに参加したりしています。

——今後の活動についてお聞かせください。

学生たちから「ラオス語を学びたい」と言われたので、勉強会を開催する予定です。ラオス語は文字も発音も難しいですから、学生たちの頑張りには期待したいと思います。また、


 読者プレゼント

ご意見・ご感想をいただいた皆様の中から抽選で、本号にて特集した松江キャンパスのある松江地域にちなんだプレゼントを10名様に差し上げます。ご意見は、ハガキまたはメールにてお寄せください。

※当選者のお知らせは発送をもってかえさせていただきます。

※応募締め切り：

2019年9月30日(月) 必着

## ■応募先

ハガキ 〒697-0016

島根県浜田市野原町 2433-2

島根県立大学企画調整室

広報誌オロリン事務局

e-mail kikaku@u-shimane.ac.jp

ラオスとは別に、県内の外国人の方々に向けて日本語教育支援の活動をしたいと考えています。松江市内の学校には、日本語の不得手な生徒もいます。そうした生徒たちを学生とともにサポートすることで、学生が地域における多文化共生のあり方を考えるきっかけになればと思います。

(インタビュー・構成・写真：瀬下翔太、福間桃華)

増原 善之 (ますはら よしゆき)：1963年生まれ。島根県立大学人間文化学部地域文化学科准教授。専門はラオス史。

